クローン羊ドリーの神話について（1）

On the Myth of Dolly the Cloned Sheep (1)

金　　承　哲

KIM, Seung Chul

1．クローンに対する大衆的イメージ

クローニング技術は，既に遺伝工学の内ではかなり前から行われてきた実験であった。にもかかわらず，ドリー誕生にたいして非常に敏感な反応がしめされたという事実は，そこに含まれているメッセージがまずきわめて感情的な次元で受容されたということを示すと同時に，そのような感情的反応がなぜおこったのか，その背景に私たちの目を向けずにはいない。[1)]

感情的な反応というものが大体そうであるように，ドリーに対する過敏な反応は，多くが誤解から生じたことが分かる。けれども，後におこなう議論によって明らかになるように，誤解による反応にもそれなりの理由があるという点に，ドリーをめぐる議論の複雑性があると思われる。

ドリーに向けられた過敏な反応は，新しい科学的発見が成し遂げられたとき往々にして一般人が見せる不適切な態度の一例でもあった。こうした意味では，ドリー・シンドロームは，フランケンシュタイン・シンドロームの延長線上にあるものといえる。[2)]

しかしながら，ドリー・シンドロームの原因は，科学者側にもその責任の一端があるということも見逃してはならない。彼らの不適切な修辞学的言明は，不必要な誤解を呼び起こしやすかったのである。ターニも指摘するように，科学者たちみずから，新しい発見について話すときにはもっと真剣にならねばならないだろう。ターニがあげている例に従ってみれば，たとえばフランシス・クリックが分子生物学的発見によって「生ける者と死ねるものの境界を越えた」と言ったとき，大衆の過敏反応はすでに十分予想されるわけである。[3)]

さらに，クローニングおよびヒト・クローンをめぐる様々なテーマについて論じるときまず留意しなければならないもう一つの点は，ある特定の科学者の発言が非科学者によって自分の説を裏付けるために恣意的に引用され

1）Audrey R.Chapman, *Unprecedented Choices. Religious Ethics at the Frontiers of Genetic Science Fortress* Press, 1999, p.81ff.

2）Dorothy Nelkin and Susan Lindee, "Cloning in the Popular Imagination" Arlene Judith Klotzko ed., *The Cloning Sourcebook* Oxford University Press, 2001, p.83ff.; Kenneth M. Boyd, "The Two-Edged Sword: Biotechnology and Mythology" Judith Klotzko ed., *ibid*., p.94

3）Jon Turney, *Franskenstein's Footsteps: Science, Genetics and Popular Culture* Yale Univ. Press, 1998, 211ff.

る危険性である。科学的成果を一般人向けに紹介する書物には，ある特定の科学者の偏向的意見がそのまま恣意的に引用されてしまうことがあるのである。たとえば，ペンスも指摘しているように，クローンの問題を否定的に扱っている書物では，クローン人間が人工子宮から生まれるように描写されているものがあるが，人工子宮とは架空のものに過ぎない。[4)]

この意味では，「危ない知識は無知よりもっと危険である」[5)]というフレッチャーの警句に，クローニングないし医療倫理全般に関する彼の立場に対して賛成するか反対するかは別としても，十分注意を傾ける必要かある。「危ない誤解」から「偏見」が起因するのは必至だからである。まさに，ヒト・クローンに対する敏感な反応は，クローニングに関する誤解から起因する部分が相当部分を占めているからである。アメリカの「国家生命倫理諮問委員会」は，クローン羊ドリーの誕生により生じた生物の複製及び人間複製の問題に対する最終報告書で，いわゆる「ヒト・クローン」という現象について人々が持っている間違った認識を次のように指摘している。

> ドリーの発表は，体細胞核移植を通じて創造される人間の子供に対してさまざまな推測をもたらす火種となった。この発表があってから，私たちが既に知っているあらゆる懸念が提起されたが，この懸念は大部分，既に存在している個人と全く同じ一人あるいは複数の子どもが生まれるという間違った認識から出発している。
>
> このような懸念は，個人の遺伝子がその個人を構成する身体的・心理的形質と単純に関係を結んでいるという間違った信念を反映している。……一人の個人とは，受精が起こってから人生の終着駅まで続く彼／彼女の遺伝子と，その遺伝子が発達する環境の間で起きる複合的な相互作用の結果である。社会的存在であると同時に生物学的存在である人間は，自分の生物学的・物理的・社会的・政治的・歴史的・心理的環境の創造物であるのだ。現代の分子遺伝学が教えてくれた偉大な教訓によれば，特定の形質や特徴は，遺伝子と遺伝子の相互作用，そして遺伝子と環境の間での相互作用という，両方の膨大な複合性によって発現される。すなわち，もう一人のあなたは，決して存在できないのである。[6)]

「クローン」という言葉も，すでに一般人の脳裏に一定の印象を刻み込んでいる。それにより生産的な議論が妨げられる面がある。こうした意味では，「生命工学における発展を大衆に伝えるためには［クローンとは］別の言葉を使うことが望ましい」[7)]という主張にも一定の説得力があるだろう。すでに専門家の間では，クローンという言葉ではなく「核細胞移植」という用語のほうが多く選り好まれているという事実もある。

面白いのは，クローン羊誕生の主役であったウィルマット自身も，「クローン」という用語の不適切な使い方から自由ではなかったという事実である。ウィルマットは，自分が人間複製に対して何の興味もないということを強調するために，次のように強弁しているが，そこで彼は，「クローニング」を「コピー」と同一視している。自分にはヒト・クローン

4）Gregory Pence, *Who's Afraid of Human Cloning* Rowman & Littlefield Publishing, 1998, p.39ff.
5）Joseph Fletcher, *The Ethics of Genetic Control. Ending Reproductive Roulette* Anchor Books, 1974, p.14
6）National Bioethics Advisory Commision, *Cloning Human Beings* Rockville, 1997, p.32
7）Lee M. Silver, "What are clones?" *Nature* 412(2000) p.21.

を作る意図が全くないということを強調するための修辞学的誇張として，意図的に「クローニング」と「コピー」を同一視したのかもしれないが，ドリーを生産したウィルマット自身が，「クローニング」と「コピー」を混用しているという事実は，ドリーをめぐる論争の多くは誤解に基づいているということを暗示するに充分であろう。後ほど詳論するつもりであるが，「クローニング」と「コピー」との混同こそが，ドリーをめぐる論争をきわめて消耗的な論争にする一つの所以である。

> われわれは人をコピーすべきであろうか。・・・私の妻と私に子供を持つことができないとしても，私の妻は，私と私の小さなコピーと一緒に暮らすために，私のコピーを作ろうとする，ということなのか。［笑い］どうして人々は，このような事実を理解することに長い時間が必要なのか。私にとっては，先の３人が正常的関係の中で暮すことができるとは思われない。また，・・・失われた親族や子供を取り戻すためという目的でクローンを作る，そういうことについても知っている。しかし，細胞を子供から取り出して「コピー」を作るなら，それはもう一人の赤ん坊になる。その子供は，別の人として成長して行こうとする。従って，新しく生まれた子供には受け入れないプレッシャーがかかるはずなので，子供のコピーを作ることなんかは考えられないことである。

ウィルマットが「クローニング」と「コピー」の差異を的確に理解しているというのは，右の引用文からもすぐわかる。ただ，誰よりもクローニングの意味について詳しいはずのウィルマットが「クローニング」を「コピー」として表現しているという事実は，形式的な面から見るとき，多くのことを暗示してくれる。というのは，クローンに関する誤解の大部分は，「クローニング」＝「コピー」という誤った認識から出発するのである。[8)]

「クローニング」＝「コピー」という等式は，実にクローンに対する大衆的イメージの出発点となっている。「複製人間」について人々の脳裏に宿るイメージは，独裁者が多コピーされることのイメージであり，または，臓器移植の手段として同じ人間を多数コピーするという観念のことである。[9)] たとえば，複製羊ドリーを特集したドイツの時事週刊誌「シュピーゲル」（Spiegel）の表紙は，独裁者ヒトラーと科学者アインシュタインと女優のクラウディア・シェーファの「カーボン・コピー」のように複製された人間が並んでいる絵が載せられていた。これは，「複製」という言葉で，人々の脳裏に浮かび上がる典型的イメージであるという点で，非常に象徴的であった。その下には「堕罪」というタイトルがくっきりした文字で書かれていた。それはまるで，クローン羊を生産するまでにいたった人類の業を断罪する宣告のようであった。

また，1976年発表されたアイラ・レビンの小説『ブラジルから来た少年』は，ヒトラーの複製を題材としている。ナチ政権下のアウシュビッツで悪名高いメンゲレ博士は，生体実験を通じて，有機体を複製する技術を開発した。彼は，複製しようとする有機体の細胞核を，核が除去された卵細胞に移植し受精することによって，ヒトラーと遺伝子の一緒の子どもを94名作った。レビンの小説に登場した複製技術は，クローン羊ドリーを作り出した過程に酷似している。

このように，クローンといえば，それは主

8）Ian Wilmut,"The ethics of cloning" *The American Enterprise* vol.9（1998）p.57.（傍点は筆者による。）
9）Gregory Pence, *ibid*., p.42～43

に空想科学小説の題材であった。クローンといえば即座に独裁者の複製，軍兵の複製などが思い出されてしまうのは，やはり空想小説のせいであろう。こうした意味では，「シュピーゲル」の例の表紙は，クローンに関する一般人の考え方を典型的に示しているケースといえる。「……数多い空想科学物を通じて，私たちは（クローン人間に関する）いくつかの事実を推測できる。もっとも初めに複製の対象となるのは独裁者であろう。……成長した複製人間は，感情なき殺人魔となり，……複製によって作られる人々は，いつも同じ時間，同じ環境の中で公産品のように作られる。決して彼らは，一人の独自的個人として作られるのではないであろう。」[10]

2．「嫌悪感という知恵」：レオン・カスの場合

アメリカの生命倫理学者のレオン・カスは，クローンに対する上記のような大衆的イメージをそのまま倫理的感覚と化した好例である。彼が委員長を務めている「大統領生命倫理委員会」は，重要な生命倫理的テーマについて，「科学者，生命倫理学者，法律家の論文を分析することではなく，ある小説家の作品を分析することによって」討論を始めたと報道されたが，[11] この委員会で通読したその小説とは，ナダニエル・ホーソンの『母斑』（The Birthmark）という短編小説であった。この作品の中でホーソンは，自分の不完全さの根を絶とうとする人間の欲望を告発している。文学作品を通して科学的テーマにアプローチしようとしたという事実が，見事にカスの立場とその問題点を示している。擬似科学的に扱う空想小説に基づく形で科学的事柄にアプローチするカスの態度は，例えばオルダス・ハクスレーの『すばらしい新世界』を頻繁に引用するところからも十分推測することができる。

生命工学的試みに対するカスの根本主義的な反対の立場は，すでに長い歴史をもっている。1978年７月，生理学者のロバート・エドワーズによって試験管ベビー「ルイズ・ブラウン」が生まれ，以後1990年代にいたるまで体外受精によって生まれた子どもの数は，アメリカに限っても約20,000名に至った。

しかし，1970年代の多数の生命倫理学者達は体外授精による妊娠に概して批判的であった。そしてカスはそのような反対者の代表者格として有名である。こうしたカスの経歴を勘案してみれば，彼が「もう一つの新しい生殖方法」としての人間複製について激しく反発するのも，ある意味では終始一貫した態度であるといえるだろう。ペンシルベニア大学の生命倫理研究所長のアーサー・カプランは，カスについてこのように評価している。

> カスは，胚性幹細胞に関する研究についてきわめて保守的な見解を持っている人物である。かれは，20余年前，体外受精についても反対論を主張した。彼は，シャーレの中で子どもを生むのは不自然的だと感じた。カスはクローニングについても，胚性幹細胞研究についても，そしてクローニングを利用する遺伝病治療についても，同じ理由で反論を展開した。面白いのはカスの経歴である。彼は1960年代初期，ハーバード大学から生化学で各位を取得したが，後に倫理学者に変身した。カスは体外受精について「体外受精によって生まれる子ども

10）*ibid*., p.73
11）Eugene Russo, "Advice Fit for a President. New bioethics council faces tough challenge, harsh criticism" *The Scientist* 16[4]:22 (Feb.18.2002) (http://www.the-scientist. com/yr2002/feb/russo_p22_020218.html) "Morality, prejudice and cloning" Nature 415(2002) p.349. 参照。*Human Cloning and Human Dignity. The Report of the President's Council on Bioethics* PublicAffairs, 2002.

たち ── まだ生まれていない人に対する非倫理実験？」という論文を書いて反駁した。それのみならず彼は，クローニングについても激しい反論を繰り広げる。たとえクローン人間が作られる可能性はほぼないとはいえ，クローン人間を許す社会とは，近親相姦，人肉食，奴隷制を，たとえ小さな規模においても許す社会とまったく同じ社会である。そのような社会は，恐ろしさに震えることを忘れた社会に間違いない。しかし実際に震えるのは，嫌悪感を呼び起こすものを合理化させてしまう社会である。[12]

これから言及する「嫌悪感という知恵」という論文の中でカスは，「20年前，『再び訪れた子ども作り』の中で体外受精に対して行った様々な反対意見を繰り返している。」[13]

カスがクローニングに反対するとき，その拠点として言及する大衆的感情は「嫌悪感」というものである。彼によれば，クローニングに関する詳細な知識のない一般人すらヒト・クローンに対してはとりあえず「嫌悪感」を感じるという事実こそ，人間複製の非道徳性を雄弁的に物語っている。この場合の「嫌悪感」とは，長い歴史の中で人間の生活に根ざしてきた家族関係や宗教的・倫理的感情を指し示している。

嫌悪感は，論争の対象にもならないであろう。昨日感じた嫌悪感も，そのうちのいくつかは日が変われば穏やかに受容されるかもしれない。しかしながら，極めて重大なケースでは，嫌悪感は深い知恵の情緒的表現であり，理性の力を超えて存在するものであり，それを十分に明確化することができない。私たちの中に，父と娘の性的関係，獣姦，死屍を損なう行動，人肉食，または強姦，殺人が呼び起こす恐怖について十分に適切な論議を提示できる者がいるだろうか。このようなことをする人が倫理的に批判を浴びるのは，彼が自分の行為を十分合理的に正当化できなかったからなのか。いや，そうではない。むしろ，自分の娘との性的関係が問題になるのは，ただ遺伝的に劣等な子孫を産む危険性があるからで，そうではない場合もありうることを証明する形で自分の行動に合理性を付与し，それによって私たちの恐怖感をなくそうとする人がいるとすれば，私たちはその人を疑わなければならないであろう。[14]

カスが羅列している非倫理的行動の例，すなわち，近親相姦，獣姦，死屍を損なう行動，人肉食，強姦，殺人などが，人を複製することと対等に比べられるものなのかは別としても，── 実は，こうした比較そのものの不当性はあまりに大きいといわざるを得ないのだが ── 果たして人間の感情が倫理の土台になりうるかということについての疑問は起こるはずなのである。「妥当な根拠のない感情は，健全な道徳的主張とはなれない」[15]というペンスの指摘どおり，感情というものはきわめて表層的であると同時に，きわめて変わりやすいものであることに間違いない。特に生命倫理との関連の中で，ペンスは次のような実例をあげている。

1940年代には，不妊女性のために人工授精を導入するのは，厭うべき，また非難されるべきことであった。しかし，今は，そ

12）*Nature Medicine* 7/9(2001) p.982
13）"Introduction" Gregory E.Pence, ed., *Flesh of My Flesh: The Ethics of Cloning Humans* Rowman & Littlefield Publishers, 1998, p.xiii.
14）Leon Kass,"The Wisdom of Repugnance" Leon R.Kass/James Q.Wilson ed., *The Ethics of Human Cloning* The AEI Press, 1998, p.18～19.
15）Gregory Pence, *ibid*., p.6

れも社会的に容認されるようになってきている。1960年代には，ダウン症候群のような遺伝状態を調べるために羊水検査が可能になったが，一部の批評家達はそれにも激しく反発した。羊水検査は完璧な子どもの選別をもたらすことにつながる可能性があるため，禁止されるべきだと彼らは主張した。エイズが発病した初期段階で，人々は，偶発的な身体接触だけによってもＨＩＶに感染するという非理性的な考えをいだき怖れをなしていた。1970年代初頭，体外受精に賛成していたのはアメリカ人の15％だけであったが，現在ではその数は70％以上になっている。[16]

このような脈絡で見れば，優良家畜を大量に生産して蛋白質を供給し，拒否反応のない臓器を作って疾病を治し癌と老化研究を防ぐという科学者の計画と，この技術の誤用ないし濫用を心配しながら複製人間のことを思い浮かべる一般人との間の認識の食い違いは，複製技術の発展にともない，それに対する人々の理解度が高まっていくにつれて徐々に解決される性質のものであるとも考えられる。実際，人工受精が一般人の情緒に受け入れられ，施行されるまでは，数10年がかかったが，体外受精の場合は，わずか数年の内に受け入れられたのである。とすれば，今議論されている人間複製については，数ヶ月内に当たり前のこととして認められる可能性も排除できない。30年前に出版された『女性の不妊』という本の中でおこなわれた新しい生殖技術についてのリーグマンとカウフマンの言及がそのまま当てはまるのかもしれない。「このように，感情的に敏感な領域においては，慣習や実践上の変化がみな既存の慣習や法律から驚愕を伴うネガティブな態度を呼び起こす。けれども，その後は，驚愕感は消えたままネガティブな態度だけを見せ，徐々にそれから漸進的に好奇心や研究，新しい価値評価などがなされ，ついには非常に漸進的，そしてかなり受け入れられるようになるのだ」。[17]

カスの論議の根底には，実は人間複製が既存の家族観を壊すという懸念が働いている。カスは言う。「より幅広い文化上の変化によって，性，生殖，生まれた生命，家族，母性と父性の意味，世代間のつながりに関する普遍的かつ貴重な理解が難しくなっている。25年前なら，堕胎は大部分不法であり，不道徳的なこととして見なされた。性革命はまだ幼児期であったし，独身女性と男女同性愛者にとっては生殖権利も，まだ不慣れなことであった。……そのとき私たちは，人間の生殖のための新しい技術と，それに伴う混乱した親族関係について，<生物学的父母性が一夫一妻制的結婚に与える支持と正当性を弱化する>と，素直に主張することができた。……ひょっとしたら，私たちは，25年前には知恵の核心とも言えた一夫一妻制を擁護したことについて，過ちをわびなければならないかも知れない。技術的変化によって，いつか与えられていた自然的境界が曖昧になり，道徳的境界線がめちゃくちゃになってしまった世界の中で，終始一貫して人間複製に反対する意見を表すのは，ものすごく難しくなってしまった。」[18]

しかし，家族のことに限って考察しても，現在の家族形態というものも歴史性を免れはしない。実際に，両親と子供を中心に形成される家族構成というものは最近になって出来上がったものであるし，現段階でも養子制度を含め，多様な家族関係が存在している。シャ

16）*ibid.*, p.6.

17）Lori B.Andrews, *The Clone Age. Adventures in the New World of Reproductive Technology* Henry Holt and Company Inc., 1999, p.260.

18）Leon Kass, *ibid.*, p.6～7.

ピロも指摘しているように，「クローニングと共に，親子関係に新しい側面が導入されるかも知れないし，……新しい生殖技術に関する研究によると，クローニング技術によって生まれた子供も，何の問題もなく家族構成員として受け入れることができる。」[19] すなわち，結婚とそれに伴う妊娠による親子関係の形成は，「親と子となる」多様な様式の中の一つの可能性に過ぎないのである。[20] 男女の性的関係による子どもの誕生を絶対化しようとする態度は，「国家生命倫理諮問委員会」が指摘するように，「間違った認識」と「間違った信念」から起因する固定観念や偏見に過ぎない。

伝統的な家族観は，実際，新しい家族観のパラダイムによって既に変わってきているし，また今も変化し続けている。高橋は，「第三回科学技術会の生命倫理委員会クローンサブコミッティー」の議事録に記録されている二人の委員の意見を引用しながら，人間複製が既存の家族間を崩壊させるという怖れは狭窄した家族観に起因すると指摘している。

> 家族観は時代に従って変るものであり，実際，人工受精のような生殖医療や女権運動などによって既に変っているのが現実なので，特に人間複製に対して家族関係の破壊の疑いを浴びせて禁じようとする考え方は無理だろう。……家族観の崩壊というのは，これは社会の変化によって随分変わってくると思いますし例えば夫婦別姓というのは，まさに家族観をどうするかという問題と随分かかわってきたと思いますので，この家族観の崩壊の促進というのは，絶対的な理由になかなかならないんじゃないかと思います。……家族観の崩壊ということですが，これは何もクローンに限らず，第三者の精子による人工授精も家族観を混乱させるとか，崩壊させるという議論が現によその国でもあり，日本ではあまり問題になってきませんでしたけれども，潜在的に法的問題があるということは，法学者がずっと前から指摘してきたことです。ですから，クローンだけ家族観を崩壊させるから禁止だということは言えないと思います。[21]

とはいえ，「だから人間複製を許そう」という議論が成り立つとは思われない。但し，家族関係の破壊という名目で人間複製を反対するのは妥当ではないということだけは指摘しておく必要がある。

人間複製を批判するカスの所見は，いわば「伝統」との関連の中でその位置を見つける。カスにとって人間を複製しようとする計画は，「私たちが自らを祖先とのつながりの中で，伝統によって規定されると考えず，私たち自身の自己創造のための企画物として考えること，つまり，自分のことを自分自身が作るものとして見なす」試みである。「自己複製は，根のないナルシス的自己再創造の延長に過ぎない。」[22]

もちろん，カスが「伝統」のことを言うとき，彼はただ時間的過去のことだけを指し示すわけではない。「複製とは，私たちが自らを統制することができないにもかかわらず，未来を完全に統制しようとする欲望を具現し

19）David Shapiro, "Cloning, dignity and ethical reasoning" *Nature* 388(1997) p.511. ここでシャピロが自分の主張の典拠として提示するのは，J.Edwards et.al. *Technologies of Procreation: Kinship in the Age of Assisted Procreation* Manchster Univ. Press, 1993である。

20）Tim Bayne and Avery Kolers, "Toward a pluralist account of parenthood" *Bioethics* vol.17 Nr.3(2003) pp.221～242.; Glenn McGee, "Cloning, Sex, and New Kinds of Families" *The Journal of Sex Research* vol.37 no.3(2000) pp.266～274.

21）高橋隆雄，「ヒト・クローン作製をめぐる倫理的諸問題」高橋隆雄編，『遺傳子時代の倫理』九州大学出版，1999年，170頁。

22）Leon Kass, *ibid*., p.9.

ている」というカスの主張の中で，そして「私たちは私たちの手に私たちの起源の捕まっていて，まるで最後の人間のような振りをしている」と彼が言うとき，人間複製に対する彼の反対は宗教性を帯びるようになるのである。実際，カスは，「人間複製に対して強力に反対した」人物の中でポール・ラムジーをあげながら，彼の「賢明で勇敢な声は，今は聞こえてこなくなってしまった」と嘆息を発しているが，ラムジーこそは，「人間は[人間複製などによって神を演じようとするより]まず人間になるのを学ばねばならない」と強く警告した神学者であった。[23]「人間はまず人間になることを学ばねばならない」というラムジーの言葉は，「私たちがみずからを統制することさえできないにもかかわらず未来を完全に統制しようとする欲望」に捕らわれているというカスの批判と同じ脈絡で理解できる。

このように，人間複製に対する反論の中でより深刻なものは，家族観を始め人間の諸判断や行為に影響を及ぼす宗教的信念に基づく反論である。リー・M・シルヴァーは，科学的発明が技術として繋がってきた歴史が証言してくれるように，ヒト・クローンの誕生もいつかは現実となると確信している。彼は，ヒト・クローンを反対する理由としては「技術的安全性の問題」「子どもの心理への配慮」「社会的福祉」「人間種の保存」などが挙げられているが，本当の反対理由は「宗教的信念」に起因すると分析する。ドリーの前での「恐怖と戦慄」は，ドリーによって人々が抱いていた神への信念が揺らがされたということを反証しているというのである。ドリーの誕生に対する最初の反応が「一種のヒステリー」であったという事実がそれを裏付けると，シルヴァーは信じている。[24]

たとえば，人工受精，特に男性配偶者の精子ではなく第三者の提供による体外受精を反対する場合，将来生まれる子供のことや夫婦の心理状態などに対する考慮がはたらいていることが多いが，もっと深いところには，宗教的な理由が潜んでいる。キリスト教の倫理学者ヘルムット・ティリケとポール・ラムジーは，体外受精による妊娠に反対するのだが，その理由として挙げられるのは，そのような行為が神によって制定された神聖な結婚の根拠を破壊させるということであった。即ち，一人の男性と一人の女性によって成立する結婚生活に第三者が介入するのは，世界を自分と結びつけた神の愛に倣うという結婚の神的な意味を壊すということなのである。[25]

人間の生命を含め，生命の複製そのものに反対する人々は，「神の小羊は神から生みだされた存在で，決して作られた存在＝被造物ではない」と告白したニカイアの信条に従いながら，生命は全的に神によって生まれるものだと主張することによって，複製による生命操作を厳しく批判してきた。[26] カスは，同様の脈絡の中で，人の出生に関する見解を次のようにまとめながら自分の立場を表明している。

> 新しい生命が生まれることを表現する次のような様々な言葉の中に現れている生命観や世界観を考えてみよう。古代イスラエル人は，生命が父から息子へ伝達される現

23）Paul Ramsey, *Fabricated Man. The Ethics of Genetic Control* Yale University Press, 1970, p.139

24）Lee M.Silver, "Reprogenetics. How Reproductive and Genetic Technologies Will Be Combined to Probide New Opportunities for People to Reach Their Reproductive Goals" Gregory Stock and John Campbel ed., *Engineering the Human Germline* Oxford University Press, 2000, p.61～63

25）Al Truesdale, *God in the Laboratary. Equpping Christians to deal with Issues in Bioethics* Beacon Hill Press, 2000, p.129ff.

26）Gilbert Meilander, *Bioethics: A Primer for Christians* William B. Eerdmans Publishing Company, 1996, p.11ff.

象に感動し，私たちが「生む」（begetting）や「子供をつくる」（sire）という言葉で訳す言葉を使っていた。ギリシア人は，生成と滅亡という循環的なプロセスの中で新しい生命の芽が出ることに感動して，「存在するようになる」という意味でのゲネシス（genesis）と呼んだ。……近代以前の英語圏のキリスト教徒たちは，創造者によって与えられた世界に感動して，「生み出す」（pro-creation）という用語を使った。現在の私たちは，機械や国民総生産量などに影響を受けて，工場のメタファーとしての「生殖」（reproduction）という言葉を使っている。[27]

こうした事情からも分かるように，カスは単に感情的論議に終始するのではない。彼の論議の基調には，有性生殖という人間の生物学的本性に対する強調がある。いわば「有性生殖の存在論的意味」を強調することによって，カスは無性生殖としての人間複製に反対しているのである。「有性生殖の存在論的意味」とは，「魂を高揚させる性の力」に基づいている有性生殖が道徳的正当性を保つという事実を指し示す，とカスは考える。[28]

人間の有性生殖が持つ存在論的意味とは何だろうか。私たちが知るべきことは，ただ有性生殖をする動物だけが自身の存在論的限界を克服するために，相互補完することができるパートナーを求める，ということである。このような存在たちにおいては，世界とはすでに無関心で，同質的な他者ではなく，あるところは適当であり，また危ないところである。そして，世界は特別な関心を持って懸命に努力する個体のために，同じ部類のごく特別でかつ補完的な存在も持つ。高等鳥類と哺乳類は，自分の餌や飽食者にのみならず，将来配偶者となる異性にも絶えず注意を傾ける。このようなすばらしい世界は，人間の社交性と性愛の根源としての結合への欲求で満ちている。[29]

人間は，男女が結合して子孫を生みだす有性生殖という生物学的事実に基づいてすべての社会的制度を作り上げて来たのであるから，そのような有性生殖の根幹を揺るがすヒト・クローン技術は，人類社会の根本を破壊させてしまう存在である。こうした見解がカスの論旨の核心にある。それゆえカスは，人間複製を擁護する人々が人間複製の有用性とする内容，即ち，不妊夫婦や同性愛者などにも子供が生まれるようになるとか，同一の遺伝子を確保したり特殊な能力を持った子供を意図的に生まれさせたりするといったことは，だれも望まないシナリオであると繰り返し批判したわけである。[30]

また，有性生殖による子どもの出生は，その子どもを，たとえ自分と同一の存在ではないにしても，愛を持って養育することにより，男女を子どもという一人の存在を通じて互いに補完的な他者として結合させる役割ももつ。さらに，性的な存在としての人間は，無性生殖をする生物とは違って，その生殖が自分の死や滅亡と結合されているという事実を自覚することによって，自分の性的欲望を完全性や不滅に対する希望へ昇華させるという宗教的な次元を獲得することができる。

さらに，無性生殖としての人間複製は，人間の正体性に深刻な問題を招来する。有性生殖とは異なり，無性生殖の場合は，生まれるものの遺伝子が産むものの遺伝子と同一であ

27）*ibid*., p.11; Leon R. Kass, *Toward a More Natural Science* The Free Press, 1985, p.46.
28）Leon Kass, "The Wisdom of Repugnance" p.29.
29）*ibid*., p.28.
30）*ibid*., p.16.

る。有性生殖にとってありえない「遺伝的正体性の問題」に伴って，「心理的正体性」，「社会的正体性」が根本から崩壊されてしまうのである。こうした論拠に基づいて，カスは無性生殖を「自然的，人間的出産方式からの逸脱」として糾弾する。[31]

ここで浮かび上がる疑問の一つは，たとえ無性生殖が「非自然的」出産方式とは認められるとしても，果たしてそれが「非人間的」方法であるといえるかということである。もう一つの疑問は，カスの言う「遺伝的正体性」が「遺伝的決定論」に陥っているのではないかというものである。「遺伝的決定論」とその問題点については後節で詳論する予定なので，ここでは言及を控えるが，「複製は［個人の］正体性と個別性に深刻な問題を惹起する」というカスの見解は，遺伝子的要素によって人間の人格性が構成され形成されるという先入見にカスも捕らえられているという指摘を回避できないと思われる。

このようなカスの立場は，今まで当然視されて来た宗教的先入観の反復に過ぎないのではないかと強く疑われる。なぜかというと，カスの言う「嫌悪感」こそが，肉体的かつ生理的な現象を宗教的差別のイデオロギーとしてきた例を，宗教史の中では頻繁に見つけることができるからである。キリストと仏の治癒行為はキリスト教と仏教の出発点であるが，彼らの治癒行為はこのような「嫌悪感」を宗教的に絶対視しようとする態度に対する批判であった。[32] スーザン・ソンタグの言葉を借りていえば，病気は常に「比喩」＝メタファーとして受け取られるという点で，典型的な宗教的・社会的現象なのである。[33]

不妊夫婦，同性愛者も子供をもつことが可能になるという次元で人間複製を擁護する主張は「だれも望まないシナリオであるだけだ」というカスの非難は，そのような宗教的イデオロギーの延長ではないであろうか。[34]

> 人間複製を厳しく禁じようという意見は……一様に，それが不自然であり，本質的に間違っているという考え方に依存している。……既に知られたものを華麗な修辞で包装したレオン・カスの主張を見よ。しかし，その根本主義者の概念を私たちの文化と法の中にもっと深く浸潤させるためには，かならず高い代価を支払わなければならないという事実が明らかになるだろう。特に，レズビアン，ゲイ，遺伝的疾病を患っている同性愛者もしくは異性愛者，そしてその以外にも，慣習とはことなる性的性向や能力を持っている人々には，明らかに代価を求めるはずである。また，性的愛着，浪漫的献身，遺伝的複製，胎教，養育の喜びと責任感などと関連する慣習とは違う方法で行動する人々にも，事情は同様であろう。[35]

31）*ibid.*, p.26
32）山形孝夫『聖書の奇跡物語 ── 治癒神イエスの誕生』朝日新聞社，1991年，参照。
33）スーザン・ソンタグ『隠喩としての病い』富山太佳夫訳，みすず書房，1982年参照。サンダ・ギルマン『病気と表象 ── 狂気からエイズにいたる病のイメージ』高橋哲也訳，ありな書店，1996年。
34）メアリ・ダグラス『汚穢と禁忌』塚本利明訳，思潮社，1995年，参照。
35）Laurence Tribe, "On Not Banning Cloning for the Wrong Reasons" Martha C.Nussbaum and Cass R.Sunstein ed., *Clones and Clones. Facts and Fantasies about Human Cloning* W.W.Norton & Company, 1998, p.230～231